

高木 博志さん(47)

「日本に京都があつてよかつた。」

京都市が、日本のふるさととしての「京都」を発信するポスター「京都の魅力シリーズ」は、

研究

ふあいる

現在第七弾となり、すっかりおなじみだ。二〇〇三年、ポスターと同時に発表されたこの挑戦的で先鋭的な標語は、大いに話題を集めた。

「非常に面白い言葉ですが、実は新しい考え方ではないのです」

高木博志さん(西)は近著「近代天皇制と古都」で、優雅で美しい「古都・京都」イメージの源流が、近代制を構築する必要性に迫られた明治政府によって作り出されたことを細かく検証した。

と、岩倉具視や伊藤博文らが仕掛けたんです」
英国、ロシア、オーストリアなど欧州列強は十九世紀、その覇権とともに、独自の文化的伝統を競い合っていた。明治維新後、皇室を中心に立憲君主制を目指していた日本は、神武天皇が即位した奈良、一千年間の都



「現在の京都イメージは明治時代に国策として生み出された」と話す高木さん(京都市左京区・京都大人文研)

明治の国策が生んだ「古都・京都」

近代国家 仲間入りに 不可欠な伝統

だった京都に目を付け、日本独自の文化の掘り起こしを始め

京都では、一八六九(明治二)年の遷都で、天皇とともに多くの公家が旧宅を引き払って東京へ移転。廃仏棄釈の嵐も吹き荒れ、衰退の一途をたどっていた。

復興にあたり、明治政府は七年、公家屋敷の立ち並ぶ御所周辺を御苑として整備した。また、平安期の国風文化に注目し、賀茂祭や石清水放生会など平安期以来の祭りを再興した。九三年のシカゴ博覧会での日本パビリオンは、平等院鳳凰堂(宇治市)を模して作られている。

欧米列強にならって日本が帝国主義へ突入する十九世紀末には、日本史の中で海外進出を果たした安土桃山時代が顕彰され始める。秀吉にゆかりの深い京都では、豊公三百年祭など関連イベントが開かれた。

そんな中、「雅」は賀茂祭に、のちに林屋辰三郎によって定義付けられる『町衆』は祇園祭に、それぞれ象徴されるようになり、古都・京都のイメージができあがっていったという。

京都と奈良という二つの古都は、その歴史と文化が強調されることで、「近代天皇制が自らの聖所として日本人の集合的記憶に刻みつけようとした特権的な空間」になっていく。「日本に京都があつてよかつた」的思考法は近代の中で養成されてきたのだ。「現代でも修学旅行などに名残を見ることができますね」と高木さんは話す。

いま暮末志士に注目する。志士という、京都が持つもう一つのイメージは特に戦前に醸成されたようだ。きな臭い時勢の中でどういう経過をたどって創出されたか。解き明かしたい」

(文化報道部 立川真悟)